第二十三卷　第一號　一三四

魏初に於ける契丹勿吉間の諸部族に就いて

小川裕人

緒言

滿洲に於ける渤海・遼・金の興亡は、一面から見れば、ツングース族に屬する靺鞨系種族と、蒙古系に屬する契丹種族(多少ツングースの血を混じた)との抗爭史とも見られる。然らば彼等は何時頃から、その抗爭の歴史を開始して居たかといふ問題を考へるのは、必ずしも徒勞ではなからう。隋書靺鞨傳に、開皇初靺鞨の使者が來貢した時の記事に引續いて、其國西北(西南の誤)與契丹相接、每相劫掠、後因其使來、高祖誡之曰、我憐念契丹、與爾無異、宜各守土境、豈不安樂、何爲輒相攻擊、甚乖我意、使者謝罪、高祖因厚勞之、云々とある。これによると、靺鞨と契丹とは隋初に於いて、既にその境を接して互に抗爭して居たことは疑ない。然らばこれより逆つて、契丹が始めて正史の專傳に載せられて居る、後魏の時代には兩者の關係は如何であつたらうか。この問題の解決の一助にもと期して、こゝに小論を草する次第である。

隋初及び魏初に於ける契丹の住地

後魏の時代の兩種族の關係を究むる前に、先づ彼等が抗爭して居たこと明なる隋初に於いて、兩者が如何なる地方で境を接して居たかを考へる必要があらう。隋初には靺鞨に七①部あつたが、その中で支那に來貢した部族は今の吉林方面を中心として粟末水(北流松花江)流域に住した粟末部であることは、津田左右吉博士の研究②せられた如くである。次に當時の契丹の住地に就いて考へるとこれに關しては早く白鳥庫吉博士が考③定せられて、これを今の老哈河の下流域とされた。隋書や北史の契丹傳に

はその住地に就いて、當遼西(今の朝陽)正北二百里依託紇臣水(今の老哈河)而居と記して居るから、博士の考定に誤はない。然るにこの記事は右兩契丹傳共に開皇末年契丹が突厥に背いて一旦隋に歸服し、その後程なく部落繁盛して北④徙した後の住地の如く記されて居て、隋初靺鞨と抗爭して居た時代の狀態とは見られないもののやうである。契丹は隋初に於いて或は突厥の支配を受け、或は高句麗や隋に寄賴して居るから、その住地の如きも、必ずしも同一とは見られない。卽ち隋初と開皇末以後とは、その住地を同うして居たと輕々には斷定出來ない。こゝに於いて靺鞨と抗爭して居た隋初には契丹の住地は何處であつたかを究むる必要がある。余はこの問題究明の手段として、隋書・北史契丹傳の記事を檢討するために、煩を顧みずこゝに隋代に關する記事の全文を揭げる。

契丹之先、與庫莫奚異種而同類、竝爲慕容氏所破、俱竄於松漠之間、其後稍大、居黃龍之北數百里、其俗頗與靺鞨同、好爲寇盜、父母死而悲哭者、以爲不壯、但以其屍置於山樹之上、經三年之後、收其骨而焚之、因而祝曰、冬月時向陽食、若我射獵時、使我多得豬鹿、其無禮頑嚚於諸夷最甚、當後魏時爲高麗所侵、部落萬餘口求內附、止于白貔河、其後爲突厥所逼、又以萬家寄於高麗、開皇四年、率諸莫賀弗來謁、五年悉其衆款塞、高祖納之、聽居其故地、六年其諸部相攻擊久不止、又與突厥相侵、高祖使使責讓之、其國遣使詣闕、頓顙謝罪、其後契丹別部出伏等背高麗、率衆內附、高祖納之、安置於渴奚那頡之北、開皇末、其別部四千餘家背突厥來降、上方與突厥和好、重失遠人之心、悉令給糧還本、敕突厥撫納之、固辭不去、部落漸衆、遂北徙、逐水艸、當遼西正北二百里、依託紇臣水而居、東西亘五百里、南北三百里、分爲十部、兵多者三千、少者千餘、逐寒暑隨水艸畜牧、有征伐則酋帥相與議之、興兵動衆合符契、突厥沙鉢略可汗遣吐屯潘垤統之、〔契丹殺吐屯而遁、大業七年、遣使朝貢方物。〕

(隋書契丹傳によつてこれを記し、括弧內のものは北史によつてこれを補つた)

右の記事の中、年次のないものに就いて見ても、別部出

伏等の高句麗に背いて隋に內附したのは開皇六年で、別部四千餘家が突厥に背いて來貢した開皇末は、その十九年であることは冊府元龜(卷九七七)降附の條に見える如くである。されば開皇四年・五年・六年・十九年等の各記事は、年次の順序に隨つて記せられて居ること疑ない。然るに最後の大業七年の朝貢の記事の直ぐ前にある、契丹と突厥沙鉢略可汗との關係の記事は、開皇十九年より大業七年までの間の出來事と見ることは到底出來ぬ。卽ち隋書の本紀や突厥傳を見ると、沙鉢略の可汗となつたのは隋開皇元年で、その死んだのは同七年なること疑ないから、沙鉢略が吐屯を派して契丹を治めしめたのは、おそくとも開皇七年以前のことでなければならぬ。

又隋書突厥傳を見ると、沙鉢略が隋に臣を稱した(隋書卷一によれば開皇五年秋七月)後程ないことゝして、

時、沙鉢略既爲達頭所困、又東畏契丹、遣使告急、請將部落度漠南、寄居白道川內、有詔許之。

とある。又隋書契丹傳には

開皇六年、其諸部相攻擊、久不止、又與突厥相侵、高祖使使責之、其國遣使詣闕、頓顙謝罪、

とある。右の兩記事を參照して見ると、開皇五・六年には、契丹は既に突厥と敵對關係に入つて居たもののやうであるから、契丹が沙鉢略から背いたのはこれより以前のことゝ見られる。果して然らば右の契丹傳に於ける沙鉢略に關する記事は、年次に隨つて記せられて居ると見ることは決して出來ぬ。斯くこの記事のみが、年の順序を亂して記されて居るのは何故であらうか、といふ疑問が起るのは當然である。

然らば契丹傳に於ける沙鉢略可汗に關するこの事件は、何時頃のことであらうか。右の記事に據れば、契丹は沙鉢略可汗の初年頃には既に突厥に歸服して居て、その後彼の遣した吐屯を殺して背き去つたことが分る。こゝに於いて、契丹が突厥に歸服した時代が問題となる。北史突厥傳に於いて、契丹に關する最初の記事は、木杆可汗の時のことゝして、

又西破嚈噠、東走契丹、北并契骨、威服塞外諸國、其地東自遼海、以西至西海萬里、南自沙漠、以北至北海

五六千里、皆屬焉、

木杆可汗の在位は、隋書の記事や突厥傳に據ると承聖二年(西紀五五三)から太建四年(西紀五七二)である。されば右の木杆可汗が東契丹を走らせたのは、その間の出來事である。然るに北史(卷九四)契丹傳には、北齊天保四年文宣帝の契丹征伐の記事を受けて直ちに、

其後復爲突厥所逼、又以萬家寄於高麗……隋開皇四年……。

とあつて、天保四年以後契丹が突厥の壓迫を受けて、高句麗に寄頼したことが知られる。而して右の隋書突厥傳と、北史契丹傳の兩記事は、その年代より見て同一のことのやうに解される。されば契丹は突厥木杆可汗の時にその壓迫を受けて東走し、高句麗の保護を求めたことが知られる。果して然らば、木杆可汗の在位中には契丹は未だ突厥の勢力範圍には入つて居なかつたやうである。されば契丹の突厥に歸服したのは、これより後のことゝせねばならぬ。斯く考へ來ると、契丹が突厥に歸服したのは木杆可汗の次の佗鉢可汗の時にこれを求めねばならぬ。この點に關し松井等氏は、その契丹勃興史に於いて「木杆在位二十年にして卒し、その弟佗鉢可汗に至りて益々强盛となり、支那の北齊・北周二國爭て姻好を結び、府藏を傾けて、突厥に賂ひ、頗る其の侵犯を恐れ居たり……契丹奚霫の如き今の東蒙古方面の諸部族が、勢ひ突厥に雌伏せざるを得ざりしこと、亦容易に窺ひ知らるべし。」と論斷されて居るが、眞に妥當な見解と言ふべきである。

而して冊府元龜外臣部朝貢の記事を檢すると、北齊武平六年頃まで、殆ど連年見えて居る靺鞨族(松花江流域)大莫婁(豆莫婁)(呼蘭河流域)等の朝貢の記事が、この年以後全く見えなくなり、隋開皇元年七月以後靺鞨朝貢の記事が再び見えて居る。この間が突厥佗鉢可汗の勢力が東方に伸びて、靺鞨等の諸部族も亦これに威服せしめられた頃で、開皇元年七月以後靺鞨が朝貢して居るのは、佗鉢可汗の晩年その勢力が衰へてこの方面に於ける諸部族に對する壓迫の少しく弛んだ結果、靺鞨が新興の隋に通ずる隙を得たのではなからうか。斯く考へると靺鞨の

西南方に居た契丹の、突厥への歸服も武平六年頃までの間のことゝ解される。

而して當時高句麗は、南方新羅百濟方面との關係のみに意を注ぎ、北方滿洲方面のことに注意する餘裕を有たなかつたので、來投した契丹に對するその保護も十分でなかつたのは、容易に想像される。契丹が突厥佗鉢可汗の壓迫の加つて來た時、遂にこれに歸屬するに至つたのは當然のことと言へよう。

開皇初年沙鉢略が佗鉢可汗に嗣いで立つた時にも、契丹は突厥の支配下に在つて、沙鉢略はその吐屯を遣してこれを統治せしめたが、突厥は沙鉢略嗣位の初頃から隋の政策が功を奏し內紛の兆が明らかに認められるので、その契丹に對する壓迫も佗鉢可汗の盛時に比して遙かに弛んで居たことは想像に難くない、されば契丹が隋に好を通じ、突厥の吐屯を殺して、これに背き新興の隋に歸服せんと欲した事情も、了解出來ることである。由來突厥・回紇等興安嶺西の遊牧民族は、その本據地の物資貧弱なるがために、契丹奚等の諸部族を支配する時、單に

政治的の他に、經濟的欲求をもその重要なる對象とする（これが物資豐富なる中原國家の羈縻と、北方民族支配との著しい相違であらう）。

卽ち舊唐書（卷一九四上）突利可汗のところに、

頡利嗣位、以爲突利可汗、牙直幽州之北、突利在東偏、管奚霫等數十部、徵稅無度、諸部多怨之、貞觀初奚霫等並來附。

とあり、同默啜可汗のところに、

契丹及奚、自神功之後、常受其徵役。

とあり、同書（卷一八〇）張仲武傳には、

先是奚契丹、皆有廻鶻監護使、督以歲貢、且爲漢諜、至是遣裨將石公緒等、諭意兩部、凡斃八百餘人。

とある。

斯く突厥や回紇の奚・契丹に對する支配が、經濟的欲望をその主調として居る一般的情勢から見て、沙鉢略の契丹支配も亦、經濟的課徵を相當に行はんとしたことは想像に難くない。されば契丹は突厥の壓迫が弛んだ沙鉢略の初年頃に於いて、突厥の支配を脫して新興中原國家

なる隋のさしのべた羈縻の手にすがらんと欲したのも無理ならぬことである。開皇初年頃突厥吐屯を殺して隋に歸した契丹は、六年頃まで突厥と敵對關係に在つたが、當時沙鉢略と和交關係に在つた隋は、その懷柔の必要上契丹を責めて突厥に服せしめたのであらう。

斯く考へ來つて隋書契丹傳の開皇四年率諸莫賀弗來謁なる記事を見ると、契丹が沙鉢略に背き去つたのはこれより以前のことであることは略想像し得る。從てこゝに問題とする契丹傳の沙鉢略と契丹との關係の記事は、右の開皇四年の記事の直前に置かれねばならぬものである。然らばこれが開皇末年以後の記事の後に置かれて居るのは何故であらうか。

こゝに於いて注意すべきは、右の沙鉢略可汗に關する記事の直前にある契丹の地理や部族に關する記事に就いてである。この記事が開皇十八年以後の記事に續いて記され、大業七年の記事より前に置かれ、然も年の順序を亂して居る、沙鉢略可汗に關する記事の直前に在るといふことは特に奇異とすべきである。

醋つて、隋書・北史の兩契丹傳を見ると、共に後魏以來のことを記し、その地理の如きも居黃龍之北數百里と言つて、魏書に在るものと同じ記事を記して居る。されば契丹の地理は魏代の資料に據つた記事と、隋代の資料に據つた記事と二つを記して居るわけである。而して右兩契丹傳が據つた資料の編者は、「居黃龍之北數百里」を、隋までの契丹の住地と誤解⑤して、これを記した關係上、重ねて隋代の地理を記す不自然を顧慮して、後者を開皇末年以後、契丹の北徙した後の住地と考へ、もと隋代の記事の最初に置かれて居たものを、開皇末年の記事の後に置きかへたのではあるまいか。而してその置きかへる際にそのすぐ後に續いて居た沙鉢略に關する記事をも、誤つて一緒に置きかへてしまつたのではあるまいか。斯く考へると隋代の記事の最初にあるべき沙鉢略に關する記事が、開皇末の記事と、大業七年の記事との間に置かれて居る不可解が、解釋出來るやうに思はれる。されば契丹傳の隋代の地理や部族に關する記事と、これに續く沙鉢略に關する記事とは、もとその風俗に關する記事

に引き續いて、開皇四年の記事の直前に記されてあつたものと見られる。

果して然らば當遼西正北二百里、依託紇臣水而居、東西亘五百里、南北三百里といふ契丹の地理は、隋初沙鉢略に統治されて居た當時のことを記したと見ることが出來る。卽ち契丹は靺鞨と抗爭して居た隋初には、遼西（今の朝陽）の正北二百里程離れた、託紇臣水（今の老哈河）の下流地方にその本據があつたのである。然しその彊域は東西五百里、南北三百里に亙つて居たといふから、相當廣範圍に擴がつて居たことが窺はれ、到底老哈河の下流のみに局脊して居たと見ることは出來ぬ。然るに老哈河の上流地方から、西喇木倫の上流地方は奚の住地であつたと推されるから、契丹の住地は老哈河の下流地方から、更に東方に擴がつて居たと考へねばならぬ。

而して契丹の東北に隣接して居た粟末靺鞨の本據地が今の吉林地方であることや、自然地理上の情勢から考へて、當時契丹の住地は綏東から通遼地方を含んで、科爾沁左翼前後旗地方にまで及んで居たと見ることが出來やう。只その突厥に歸⑥服して居た關係から、その本據地が比較的突厥に近い、西方の老哈河の下流域に在つたのであらう。果して然らば、當時契丹と靺鞨とが抗爭して居た地方は、遼河と嫩江とを結ぶ線あたりと見るのが妥當であらう。

而してこの地方は三國時代契丹の前身と言はれて居る鮮卑族と、夫餘との互に境を接して居たところであることは、箭⑦内博士の既に主張された如くである。隋代の契丹・靺鞨の境界を、以上の如く解して、次に後魏時代の兩者の關係を考へて見よう。

後魏時代に於ける勿吉の住地が、今の哈爾賓地方であることは、余が小⑧論「靺鞨史研究に關する諸問題」に於いて、既にこれを主張したところである。然らば當時の契丹の住地は何處であらうかといふ問題を考へよう。

魏初の契丹の住地に就いては、魏書契丹傳に、契丹國在庫莫奚東、異種同類、俱竄於松漠之間、登國中、國軍大破之、遂逃逝與庫莫奚分背、經數十年稍滋蔓、有部落於和龍之北數百里とある。この記事に基いて、白鳥博士

は、「契丹は魏の時には老哈河の上流域に據れる庫莫奚の東北、朝陽の北數百里の處に放牧せるなり」[9]と言はれた。箭内博士は大體右の說に據られ、後魏の初期には契丹は老哈河の東方に連亙する山脈を以て、庫莫奚と相隣り、朝陽の北數百里の處に放牧せるなり」[10]と言はれた。

單に朝陽の北數百里のみでは、具體的にその地を知ることを得ないが、これに關する史料は全く不備なれば、これも亦已むを得ないことである。只一つ多少でも手懸となるのは、延興中魏に朝貢した勿吉の使者乙力支の通路である。魏書勿吉傳に、

乙力支稱、初發其國乘船泝難河西上、至太泠河、沈船於水、南出陸行、渡洛孤水、從契丹西界、達和龍。

とある。この難河は今の東流松花江、太泠河は淘兒河、洛孤水は西喇木倫、和龍は朝陽なること疑ないから、乙力支は哈爾賓地方のその本國を發し、東流松花江を逆り嫩江から淘兒河に入つて、今の洮南附近で上陸し、朝陽を目指して南進し、西喇木倫を渡つてから、契丹の西界を過ぎて、朝陽に達したのである。その老哈河を渡つたことが記されて居ない點から、兩河合流以後の西喇木倫を渡つたと見る方が妥當であらう。從つて今の交通路より考へて、彼等は奈曼王府地方を通過したと推せらる。されば當時の契丹の住地は、奈曼王府より東方に在つたと見るべきであらう。その地方に遊牧民の好適なる住地を求めると、矢張り綏東から通遼方面に亙る科爾沁左翼前後族地方とすべきであらう。而してその住地は、契丹が遊牧種族であることと、自然地理上の形勢から見て、三國時代の鮮卑と夫餘族の境介線あたりが、契丹の東境であつたと見るべきであらう。

魏代に於ける勿吉と契丹との關係

以上の如く考察すると、隋初に於けるよりは魏初に於ける方が、契丹の中心部落は東方に在つたのである。而して隋初には契丹は靺鞨と境を接して抗爭して居たことは前述の如くである。然らばその中心部落が隋初よりは東方に在つた魏初に於いて、契丹は靺鞨の前身なる勿吉と境を接して居たであらうか。次にこの問題を檢討しよう。

魏書勿吉傳太和十三年に當るところに、勿吉國附近の國として、大莫盧國・覆鐘國・莫多回國・庫婁國・素和國・具弗伏國・匹黎尒國・拔大何國・郁羽陵國・庫伏眞國・魯婁國・羽眞侯國の十二國の名が擧げられ、これ等が前後各遣使朝貢したことが記されて居る。この筆頭に記された大莫盧國[11]は、魏書勿吉傳の初の部分や、同書の專傳に見える豆莫婁、唐書流鬼傳の達末婁とは同名異譯で、今の哈爾賓の對岸呼蘭河流域に住した部族なることは、津田左右吉博士がこれを主張されて以來、何人も異論なきものゝ如くである。而してこの大莫婁國の所在が、呼蘭河[12]流域であつたとすれば、勿吉（余はこれを哈爾賓附近とする）國の周圍の國として擧げられて居る、他の十一國も、亦これからあまり遠[13]くない地方に擬定するのが妥當で必ずしも黑龍江下流域にこれを求むるを要しないであらう。

この問題を一層適確に決定するためには、魏書契丹傳に列擧されて居る東北群狄八部に就いて、考へる必要があらう。卽ちこの契丹傳の記事は、次の如きものである。

顯祖時、使莫弗紇何辰奉獻、得班饗於諸國之末、歸而相謂言國家之美、心皆忻慕、於是東北羣狄聞之、莫不思服、悉萬丹部・何大何部・伏弗郁部・羽陵部・日連部・匹絜部・黎部・吐六于部等、各以其名馬文皮入獻天府、遂求爲常、皆得交市於和龍密雲之間、貢獻不絕。

この記事を虛心に檢すれば、これ等の八部は必ずしも契丹內の八部ではなく、契丹の朝貢に倣つて名馬文皮を以て魏に貢した、東北群狄の名として列擧されて居るに過ぎない。

然るに遼史がこれを契丹の始祖なる奇首可汗[16]の八部として記載したので、我が松井等氏もその契丹勃興史に於いて、これを契丹內の部族とし、古[17]八部として擧げられた。然しこれを契丹內の八部と見ることは果して妥當であらうか、魏書卷六帝紀には皇興元年二月の條に、

高麗・庫莫奚・具伏弗・郁羽陵・日連・匹黎爾・于闐諸國各遣使朝貢。

とあり、翌年夏四月の條には、

高麗・庫莫奚・契丹・具伏弗・郁羽陵・日連・匹黎爾・吐六

于・悉萬單・阿大何・羽眞候・于闐・波斯國遣使朝獻。

とある。右兩記事に列擧されたものは、それが契丹と並べて記されて居る點に於いて、契丹內の部族ではなく、契丹と同じく各獨立した國或は種族であつたことは疑ない。然るにこれ等の中には、前記契丹傳に記された八部と同じものもあり、又類似のものもある。今試みに契丹傳のものを部の字を省いて書き下すと、

悉萬單・何大何・伏弗郁羽陵・日連・匹絜・黎・吐六于。

となる。右の中悉萬單と日連とは本紀のものと全く同じであり、通典の記事を見ると何大何は阿大何となつて居るから、後者を正しいとすれば、本紀の記載と同じくなる。又吐六于は通典では比六于となつて居るから、吐も比も叱の誤であるかも知れず更に于は手の誤寫とも見られる。又契丹傳の伏弗郁羽陵はその上に具の字の脫したものと見れば、全く本紀と同じくなる。斯く考へ來つて匹絜黎を見ると、これも本紀に於ける匹黎爾の誤寫と見られぬこともない。

以上の推測を以て正しいとすれば、契丹傳は、

悉萬單・阿大何・具伏弗・郁羽陵・日連・匹黎爾・叱六手。

とあるべきものを、誤寫してそれに部の字を附したのであらうと想像される。

こゝに於いて更に前記勿吉傳の十二國の名を檢するとその中に、具伏弗國・匹黎尒國・郁羽陵國といふのがある。これは契丹傳の具伏弗・郁羽陵と匹黎爾に當ること疑ひないから、契丹傳の部名は正しくは悉萬單部・阿大何部・具伏弗部・郁羽陵部・日連部・匹黎爾部・叱六手部とあるべきを、編者が誤寫した上に、誤讀して契丹傳所載の如きものとなつたのであらう。而して更に遼史の編者はこれを誤解し、契丹の奇首可汗の八部となし、我が松井等氏亦これを無批判に踏襲して、契丹の古八部となしたのであらう。

斯く解し來れば、具伏弗國・郁羽陵國・匹黎爾國等及び若し阿大何(契丹近傍のもの)が拔大何(勿吉近傍のもの)に等しいならば、この國も亦契丹附近のもので、同時に勿吉附近のものでもあつたのである。さればこれ等の諸種族の住地は契丹と勿吉との中間であつたと解される。

然るに當時契丹の住地は今の奈曼王府より東方科爾沁左翼前後旗を含んで、遼河地方までの間であること既述の如くであり、物吉の住地は哈爾賓地方を中心として居たとすれば、この兩者の中間に右の諸種族の住地を求めんとすれば、今の伊通河孟や、北流松花江の中流域地方が最も適當であらうと考へられる。而してこれ等の諸種族と契丹との境界は、矢張り三國時代の鮮卑（契丹の前身）と、夫餘との境界線、卽ち遼河と嫩江を結ぶ一線であつたらうと想像するのは、不都合ではなからう。

更に高句麗と勿吉との關係を見ると、當時の高句麗の境域は、箭内亘博士の研究[18]によれば、西は遼河を以て後魏國に隣り、北は輝發河の上流域を含んで、今の邊棚や松花佟佳兩江の分水嶺山脈を以て夫餘の故地に連つて居たやうである。後魏の中期には既に勿吉は小白山山脈を越えて今の阿什河地方に進出して居たから、夫餘の故地も相當廣範圍に亙つてこの種族の占據するところとなつて居たこと疑ないが、未だ夫餘の全境域が勿吉種族の住地となつて居たのでないことは、前述の如き諸種族が勿吉と契丹との中間に尙存在して居たことからも推定出來る。

斯く考へ來ると、夫餘の故地に在り、且つ契丹と勿吉との中間に存した前記阿大何・具伏弗・郁羽陵・匹黎爾等の諸種族は、その住地と前後の政治的事情から推察して夫餘國民の遺衆の殘存して居たものではなからうかと想像される。

夫餘國の運命に就いては、晉書（卷九七）夫餘國傳には、

至太康六年、爲慕容廆所襲破、其王依慮自殺、子弟走保沃沮、帝爲下詔曰、夫餘王世守忠孝、爲惡虜所滅、甚愍念之、若其遺類足以復國者、當爲之方計使得存立、有司奏、護東夷校尉鮮于嬰、不救夫餘、失於機略、詔免嬰、以何龕代之、明年夫餘後王依羅、遣使詣龕求率見人、還復舊國、仍請援、龕上列遣督郵賈沉、以兵送之、廆又要之於路、沉與戰大敗之、廆衆退、羅得復國、爾後每爲廆掠其種人、賣於中國、帝愍之、又發詔以官物贖還、下司冀二州、禁市夫餘之口。

とあり、又資治通鑑卷九七、西晉永和二年春正月の條に

は、

初夫餘居于鹿山、爲百濟所侵、部落衰散、西徙近燕、而不設備、燕王皝遣世子儁、帥慕容軍・慕容恪・慕輿根三將軍萬七千騎、襲夫餘、儁居中指授、軍事皆以任恪、遂拔夫餘、虜其王玄及部落五萬餘國而還、皝以玄爲鎭軍將軍、妻以女。

とある、夫餘國は太康六年慕容廆のために襲破され、其王依慮は自殺し、その子弟は沃沮(今の間島地方)に走つて東夫餘國を建て、本國は一旦滅亡したが、翌年晉帝の援を得てその本國が又再興された。その後百濟(池內博士によれば高句麗の誤)の壓迫を受けて西徙したが、永和二年に至り、燕王皝の大軍を受け、其王及び部落五萬餘口が虜し去られて、その本國は滅びてしまつた。然し如何にその王と五萬餘國が俘掠されてしまつても、曾て方二千里戶八萬を擁して居た夫餘口が、全く空虛に歸してしまつたと斷ずることは出來ぬ。後魏世祖の時(西紀四三七年頃)高句麗に使した李敖の報告として、魏書高句麗傳に、

敖至其所居平壤城、訪其方事、云、遼東南一千餘里、東至棚城、南至小海、北至舊夫餘、民戶參倍於前魏時、其地東西二千里、南北一千餘里、云々。

とある。こゝに舊夫餘に至るとあるから、夫餘の故地は未だ高句麗に併呑されたのでないことは疑なく、又當時の大勢より見てこの地方を他種族が占據したやうにも思はれないから、依然として夫餘國遺殘の土豪の割據するところとなつて居たと見ること不都合ではなからう。

然るに延興年間には、既に東方の挹婁族は小白山山脈を越えて夫餘故地に侵入し、勿吉の名を以て今の阿什河地方に本據を置き、後魏にも朝貢して居る。

これによつて見ると夫餘の故地に割據せる土豪の多くが勿吉の服屬するところとなつたことは想像されるが、然し當時契丹と勿吉は尙その境を接するに至らず、その中間に尙諸部族の介在するものがあつたとすれば、これは夫餘故地に於ける土豪の尙殘存するものであつたと見ることは不都合ではなからう。されば余は前記の如き勿吉と契丹との中間に於ける阿大何以下の諸族は、蓋し右

の夫餘國遺殘の土豪の未だ勿吉に征服せられざるものであつたと解せんとする。

斯くの如く、後魏時代には勿吉と契丹との間には夫餘の遺衆が殘存して居たのに、隋初には前述の如く勿吉の後身なる靺鞨と契丹とは、既に境を接して抗爭して居たのである。既述の如く後魏の時代には契丹の住地は、その西境は少くとも今の奈曼王府より東方に在つたと推定されるのに、隋初には契丹の中心部落は今の朝陽の正北二百里で、老哈河の下流卽ち西喇木倫と老哈河との合流地方近くに在つたと推定される。されば契丹の中心部落は魏初に於けるよりは隋初に於ける方が西遷したこと疑ない。その東境は既述の如く兩時代とも同じで、三國時代の鮮卑と同じく遼河以西の地であつたとしても、隋初に於いてはその中心勢力が西方に遷移して居ることを認めねばならぬ。從て大勢より見て、魏初に於けるより隋初に於いて、契丹が東遷したと見ることは到底出來ぬ。されば魏初に於いて契丹と勿吉との間に阿大何・具伏弗・郁羽陵・匹黎爾等の諸族が介在して居たのに、隋初には勿吉の後なる靺鞨が契丹と境を接して居たとすれば、當然靺鞨の西方膨脹を推定すべきであらう。されば魏初に今の哈爾賓地方を中心として擴つて居た勿吉は、その西方發展の結果、隋初には北流松花江から伊通河流域地方にも住するに至つたのであらう。既述の如く夫餘遺衆の諸族がこの地方に住して居たと推定し得るとすれば、彼等は靺鞨族遷徙の結果多くその征服するところとなつたと見るべきであらう。而して初は彼等は靺鞨族の屬民として異衆を成して居たかも知れぬが異氏族結婚を原則とし、屢異種族結婚をもしたと推せられる彼等の間に在つてはその混血に多くの年月を要しなかつたであらう。隋初には靺鞨族の中、粟末部は今の吉林烏拉地方を中心として新京農安地方もその勢力範圍であり、且つ津田博士の主張せられた如く、契丹と抗爭して居たのも彼等であつたとすれば、夫餘の遺殘なる阿大何等の諸部を包含するに至つたのも、この粟末部であつたらうと推定される。太平寰宇記(卷七一)所引の隋北蕃風俗記には、初隋開皇中、粟(粟の誤)末靺鞨、與高麗戰不勝、有厥稽部渠長突

地稽者、率……凡八部、勝兵數千人、自扶餘城西北、擧部落向關內附、處之柳城、乃燕郡之北とあるから、隋初粟末靺鞨の本據は扶餘城(扶餘滅亡の地)の西北であつたやうに推せられる。又舊唐書(卷三九)愼州の條には、武德初置、隸營州、領涑沫靺鞨烏素固部落とあり黎州の條には、載初二年析愼州置、處浮渝靺鞨烏素固部落、隸營州都督とある。涑沫靺鞨は浮渝靺鞨とも稱せられて居たこと疑ない。これによつて、涑沫靺鞨は夫餘の故地に據りその遺衆をも包含したと推せられなからうか。

結語

鮮卑族(契丹の祖先)と夫餘族(比較的靺鞨系種族に近くその生活樣式の如きも等しく農耕的である)とは、三國時代に於いて、今の遼河と嫩江とを結ぶ一線あたりでその境を接して居た。その後夫餘族が鮮卑族出身の慕容氏のために滅されるや、夫餘族の盛時その東方牡丹江流域以東の密林地帶に於いて、遙かに低度の文化狀態に停滯して居た挹婁(卽ち肅愼)族(勿吉靺鞨の祖先)が、西進して夫餘の故地に發展し、後魏の頃には、先づ勿吉と稱ばれて今の阿什河流域に本據を占め、更に次第に西南方に遷徙して、その靺鞨と記されるに至つた時代には、全く夫餘族の故地を占據し、隋初には旣に契丹と境を接し三國時代に鮮卑と夫餘とが結んだ關係を隋初には夫餘の故地に據つた靺鞨族と鮮卑の後と稱せられる契丹族とが再び開始して居たわけである。挹婁族はその牡丹江流域以東の地に住した時代には、文化程度の可成り高い夫餘族の住地と境を接し、一度はその政治的支配[20]をも受け、且つ遠く中原國家にも朝貢したりした關係から、次第に文化にも向上して居たことは想像されるが、この種族が特に格段の進步をしたと認むべきは、彼等が夫餘の故地に據るに至つた以後のことであらう。これは隋初の靺鞨諸部族の中、夫餘族の故地に據つて居た部族のみが、その固有の石鏃文化より脫して居た事情から想像される。斯くの如き進化は、その遷住地が比較的農耕に適し、中原國家への交通にも便宜多い等、自然的環境の相違にも由ること勿論なるが、彼等が文化程度の高い夫餘族の故地を占據し、その遺衆を征服融合するに至つたことも、

その一因でなければならぬ。

夫餘の遺衆を相當多くその中に包含したと推せられること、既述の如き粟末靺鞨の八部が、開皇中高句麗の壓迫を受けて隋に降つたが、その當初から中國の風俗を悅び、冠帶を被らんことを請うたといふから、當時彼等の支那文化に對する希求の可成り高かつたことが推せられる。これによつて粟末靺鞨が隋に來降する以前から、文化的に相當向上して居たことが想像される。斯くの如きはその地理的に中國に近く、早くから朝貢の機會を得たといふことも重大なる理由の一ではあるが夫餘の遺せる文化の攝取といふことも、亦その理由の一として認めねばならぬであらう。彼等が渤海國の建設者として、同種族中最先に政治的に大活動をした理由もこゝに存するのではあるまいか。而して彼等が渤海國の貴族階級として、濊貊系の高句麗人の分子を交ふる以前、既に同じく濊貊系の夫餘族の血[21]を多く混じて居たと想像したいのである。

① 靺鞨諸部の住地に就いては、拙稿、史林、二二ノ二、所載「鐵利の住地に就いて」及び、東洋史研究、二の五、所載「靺鞨史研究に關する諸問題」參照。

② 滿鮮地理歷史研究報告、第一卷、勿吉考、頁(二七―二八)

③ 史學雜誌第二十三編、東胡民族考(第十一回)頁一一四〇、

④ 資治通鑑(卷一八〇)を見ると、大業元年には契丹が營州(今の朝陽)に寇し、隋は兵雲起を遣はして突厥啓民可汗の兵と共にこれを伐たしめて居る。これによつて契丹は、當時既に隋に背いて居たことが推せられるから、彼等の北徙はこの年より以前のことであらう。開皇末年、彼等が突厥に背いて隋に歸してから、五六年を出でずして、彼等の部落が繁盛したと言へば、これより先、開皇六年以後高句麗に背いて隋に來投した出伏等、分散して居た部落までが一緒になつて北徙したのではなからうか(因にこれ等契丹の分散は隋書契丹傳開皇六年の條に、其諸部相攻擊久不止とある事件に基くものではなからうか)。

⑤ 編者がこの地理的記載を隋代に至るまでのものと誤解して居たことは、隋書にこれに引續いて記されて居る風俗の記事が、魏書に據つたものでなく、隋代の資料に據つたものと考へられることからも明らかである。

⑥ 突厥碑文を見ると、唐代突厥が興安嶺東の諸部族を、徙らせた例が屢々認められる。例へば闕特勒碑文の前面七行目、芯伽可汗碑文の前面三行、一七行、三九行等の如くである。唐代突厥が征服部族を統治上都合のよいところに遷徙せしめたことはこれによつて窺はれる。更に遡つて、隋代に於

いても奚・契丹がその突厥の支配下に入るや比較的突厥の勢力の及び易い、西喇木倫上流には奚、老哈木倫の下流地方には、契丹の本據を遷したことは略想像されよう。殊に隋末この兩種族が、突厥始畢可汗の治下に在つた時から、矢張り右兩地に居たことは唐初の狀態よりも推定される。東洋史研究、二ノ五、頁八一、註、四參照。唐末回紇の支配下に於いて、契丹が西土二河の合流地方に住したのもこれと同じ關係であらう。只奚が西喇木倫の上流地方に居なかつたのは、この地方が可突于の亂後、契丹族の一部分（後の迭剌部）の占據するところとなつたからであらう。

⑦ 滿洲歷史地理、第一卷、頁、二一二。

⑧ 東洋史研究二ノ五

⑨ 史學雜誌、第二十三編、東胡民族考（第十一回）、頁一一四〇。

⑩ 滿洲歷史地理、第一卷、頁、三二一。

⑪ 松井等氏は、その契丹勃興史（滿鮮一）頁（一三八—一三九）に於いて、義縣西北大凌河左岸の萬佛堂内の景明の碑に、後魏の使者契丹に赴く途次この地を經た由を記してあるのを見られ、之に據つて考ふれば、後魏の代、契丹の住みたる地は西喇木倫の南方なりといふが中にも、殊に其の本據なりしと想はるゝは、今の綏東縣（小庫倫）方面なりと言はれて居る。

然し、魏書契丹傳には、契丹は太和三年に高句麗・蠕蠕の侵迫を懼れて、魏に内附し、自狼水（今の大凌河）の東に遷徙したことが見えて居る。而して北齊天保四年の文帝の契丹征伐の時は、契丹は今の義州から朝陽の左右に居たもののやうである、（北齊書卷四文宣帝紀）。されば契丹は太和三年以來、今の大凌河の東方に居り、魏の衰微後（？）朝陽附近に擴がつて住して居たと見るのが妥當のやうである、（魏書契丹傳には契丹の朝貢に就いて朝貢及齊受東魏禪、嘗不斷絕とある）。景明年間には、勿論契丹は大凌河の東に居たから、この地に使した後魏の使者が、義州を通過したのは當然で、これによつて黄龍の北數百里なる契丹の原住地を決定せんとすることは適當でない。

⑫ 魏書勿吉傳には、勿吉人に關する記事に於いて、其人勁悍於東夷最强、言語獨異、常輕豆莫婁等國、諸國亦患之、と記され、同書の豆莫婁傳には、在勿吉國北千里、去洛六千里、舊北夫餘也とある。又唐書卷二二〇、流鬼國傳には、開元十一年、又有逵末婁逵姤、二部首領朝貢、逵末婁自言、北扶餘之裔、高麗滅其國、遺人度那河因居之、或曰、他漏河、東北流入黑水、逵姤、室韋種也、在那河陰、涑末河之東、西接黄頭室韋、東北距逵末婁國云とある。

⑬ 津田博士は勿吉の本據を今の石頭城子附近とされたから、それより北方千里なる豆莫婁の住地を、哈爾賓の對岸附近とされた（滿鮮、一、室韋考、頁五九）。然し勿吉の本據は難河（東流松花江）に沿ふた今の哈爾賓地方とするのが最も

妥當なること、余が「靺鞨史研究に關する諸問題」に於いて論じた（東洋史研究、二の五、頁六七―六九）如くであるから、魏書豆莫婁傳に、「在勿吉國北千里……在失韋之東」とある豆莫婁の位置は、哈爾賓の對岸よりは北方の呼蘭河流域とする方が妥當であらう。

⑭ 東洋史研究、二の五、頁六九。

⑮ 和田教授は、これを黑龍江流域のものと見られて居るやうである。東京帝大の第百六十回東洋史談話會に於いて「支那の記載に表はれたる黑龍江下流域の土人」なる題下に講演をされ、その概要として教授自身の手記を發表され、その中に、魏書や勿吉傳に見えたその傍の十餘國といふものは、必ず黑龍江下流域の土人を指したものに相違ないと言つて居られる（史學雜誌四八、頁九六四）。教授のこの考は白鳥博士（東胡民族考）や、滿洲歷史地理（第一卷頁四三〇）時代の考なる、勿吉の本據を牡丹江流域とし、涑末河を東流松花江、難（那）河を黑龍江とし、大莫婁（豆莫婁、逢末婁）を黑龍江下流の北方にて、今日の沿海州の北邊に置かんとした說に關聯を有するものかと推せられる。然し難（那）河を今の嫩江及び東流松花江の或る部分に比定し、大莫婁を今の呼蘭河流域に置かんとする津田博士の說（滿鮮地理歷史研究報告第一、頁四三〇）は白鳥博士も早くこれを認められ（史學雜誌第三十編、頁一〇―一二）既に異論なきものの如くである。大莫婁が呼蘭河流域に在つたとすれば他の十餘國も亦これを黑龍江下流域に置くべき理由はないやうである。

⑯ 遼史、卷三二、營衞志、部族上。

⑰ 滿鮮地理歷史研究報告、第一、頁一五三。

⑱ 滿洲歷史地理、第一卷、頁（三一六―三一八）。

⑲ 勿吉の阿什河流域に進出した時代は知り得ないが、その使者乙力支が後魏に朝した延興年間には、既にその本據がこの地方に在つたと見てよからう。

⑳ 三國志魏書挹婁傳には

自漢以來臣屬夫餘、夫餘責其租賦重、以黃初中叛之、夫餘數伐之、雖其人衆少、所在山險、鄰國人畏其弓矢、卒不能服也。

とある。

㉑ 契丹國志初興本末に見える契丹の酋長名、麵呵、喝呵、畫里晉呵等の呵が、夫餘の官名なる馬加・牛加・豬加・狗加の加や、高句麗の諸加・古雛加等の加と同語であることは、白鳥博士がこれを指摘されて以來誰も疑ふものはないやうである。更に唐代契丹の君長の姓なる大賀氏の大賀が、元來は姓そのものではなく、契丹の君長の稱號であつたであらうといふ考說を余が曾てこれを出した（東洋史研究、一ノ五、頁一九―三〇）。今こゝにその論據を擧げると共に、多少の補正を加へたいのである。

舊唐書（卷一九九下）契丹傳には、其君麾會、率其部落來降

とあり、册府元龜(卷九七七)降附の部には、(貞觀二年)四月契丹太賀摩會、率其部落來降とある。この兩者は同一の事件に關する記事なること疑なく、且つ舊唐書と册府元龜とは、その資料を多く同じくして居ることが推せられるから、この兩者も亦同一の資料に基いたもので、前者に於ける其君摩會は後者に於ける契丹太賀摩會の意譯であるとの推定も一應は許されよう。然らば、前者の其・君は各後者の契丹・太賀に當り、從つて太賀は君といふ意味を表す語と見てもよいやうである。夫餘や高句麗では、大貴族を稱ぶのに大加と言つたやうである。契丹の大賀は、蓋しこの大加と同系統の語であらう。又遼史の奇首可汗は、高句麗の古雛大加と同系統の語かも知れぬ。斯くの如く契丹と濊貊系の夫餘や高句麗とは、その言語を同じうして居るものもあるやうである。然しこの理由のみによつて、直ちに兩者の人種的混淆を推することは早計であらう。契丹族と夫餘族との關係は明らかでないが、高句麗とは隋書契丹傳に南北朝末のこととして、其後爲突厥所逼、又以萬家寄於高麗とあり、又隋開皇六年の條には、其後契丹別部出伏等、背高麗率衆內附、高祖納之、安置於渴奚那頡之北とある如く政治的にも、契丹と高句麗とは南北朝から隋初にかけて相當關係のあつたことは疑ひない。然るに隋初契丹傳開皇四年の條には、率諸莫賀弗來謁とあつて、諸莫賀弗の上に、之を率ゐる指揮者があつたやうであり、同じく隋初の狀態

として、有征伐則酋帥相與議之、興兵動衆合符契とあつて當時契丹諸部の間には軍事に關しては、或る程度の統一があり、從つてその時に於ける指揮者の存在が推せられよう。されば當時の契丹に於いて、非常時に於ける軍帥の發生して居たことは疑ひなからう。斯くの如き時代に政治的にも關係のあつた高句麗の官稱なる大加が、契丹の軍帥の稱號として用ひられるに至つても不思議はなからう。斯くの如く考へると前記の大賀摩會は貞觀初年時代の契丹の軍帥であつたのであらう。而して契丹の軍帥(大賀)は顯慶年間阿卜固の亂までは必ずしも世襲ではなかつたが、この亂の結果唐は契丹羈縻の必要上、松漠都督を窩哥の子孫のみよりこれを任ずることとなつたので、契丹の大賀は窩哥の子孫のみから出づることとなり、因て大賀は窩哥の子孫一族の姓の如く用ひられるに至つたのではあるまいか。契丹主は顯慶年間から開元中期まで大體世襲(家長制家族內に於ける)であつたやうであるが、これは唐の勢力といふ外的要件に因るもので、その社會の自然的進化ではなかつた。されば彼等が唐の勢力より離叛するや、再び世襲の原則は敗れた。然し唐末契丹諸部の關係は、隋末唐初の如きルーズなものではなかつた。一度唐の勢力といふ外的要因により緊密ならしめられた諸部の結合は、この外的要因の消失によつても退化はしなかつた。唐末の契丹主は隋初に於けるが如き單なる軍帥ではなく、選舉制によるものであるが、

名實共に契丹の大酋長であつた。隋初には兵多者三千、少者千餘とあつて、その兵數を數ふるのに各部別であるが、唐代になると勝兵四萬三千人、分爲八部とあつて、同じく非常時に共同行動するのであつても、その結合の程度に相違があることが認められる。然し隋初に於いても、これを魏代に比すると、その進化が認められるのではなからうか即ち魏書契丹傳太和三年の條に、其莫弗賀勿于、率其部落車三千乘、衆萬餘口、驅徒雜畜、求入内附とあつて、當時契丹諸部を率ゐたものは莫(弗)弗と稱して居たのに、隋初には前記の如く率諸莫賀弗來謁とあつて諸莫賀弗の上に、更にこれを率ゐる指揮官が存在し、その稱號として高句麗の官稱大加が用ひられたとすれば、この稱號の採用は契丹諸部の結合が前代に比して幾分增して居る證據とも見られなからうか。